

推薦入試・AO 入試の効果に関するレビュー研究

—「個別大学の追跡調査」と「複数高校・大学を対象とした調査」の結果に注目して—

木村 治生 (ベネッセ教育総合研究所)

本研究は、2010 年以降に発表された推薦・AO 入試の効果をテーマとした先行研究について、「①個別大学の追跡調査」と「②複数高校・大学を対象とした調査」の結果を系統的にレビューしたものである。分析の結果、推薦・AO 入試の効果を否定的に評価する研究は①にも②にも多い一方で、肯定的に評価する研究は②には少ないこと、とくに学業成績以外の多様な資質・能力をアウトカムに設定した研究が欠落していることが明らかになった。大学の条件による効果の違いを検討した研究が少ないことや、高大を接続する縦断研究がないことも課題である。

キーワード：推薦入試 (学校推薦型選抜), AO 入試 (総合型選抜), 追跡調査, 成果の可視化

1 研究の目的

文部科学省の「国公立大学・短期大学入学者選抜実施状況の概要」で AO 入試の調査が開始されたのは、2000 年度からである。それによると、同年度の AO 入試による入学者数は国公立を合わせて約 8,000 人しかいなかったが、2010 年度には約 53,000 人と急拡大した。AO 入試はその後微増しており、2018 年度は約 60,000 人で、私立大学では入学者の 11.4% を占めている。一方で、推薦入試は、2000 年度の段階ですでに入学者の 3 割を超えて定着していたが、その後漸増しており、当時の約 188,000 人から 2018 年度は 218,000 人となった。今や国立大学では 15.9%、私立大学では 52.4% が推薦・AO 入試を経て入学しており、入学者選抜としての重要度は増し続けている。

こうした推薦・AO 入試の効果については、すでに西郡 (2011) が『大学入試研究ジャーナル』に掲載された個別大学の追跡調査を対象にレビューを行っている。この論文では、入試区分による比較結果から、推薦入試による入学者が優秀であることや、AO 入試による入学者の学習意欲が高いことを示す研究が多いことが指摘されている。しかし同時に、「全ての大学や学部にとって汎用的な追跡調査の方法や共通的に援用できる分析結果はほとんど存在しない」(西郡, 2011: 36)ともいう。レビューが示唆するのは、大学が置かれている状況によって、入試の効果は異なるということである。

それでは、推薦・AO 入試がさらに拡大した 2010 年以降の研究において、それらはどのように評価されているのだろうか。この間、各大学による個別の追跡

調査は広がってきた。また、数は少ないながら複数の高校や大学にまたがる量的調査によって、推薦・AO 入試の効果を総合的に検証しようとする試みも見られるようになった(詳細は後述)。

折しも、文部科学省はすべての選抜方法において学力の 3 要素を評価する方針を打ち出している(「平成 33 年度大学入学者選抜実施要項の見直しにかかる予告」)。しかし、一般入試¹⁾で主体性や協働性を評価できる資料を活用することや、推薦・AO 入試で「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を評価することは、大学に多大なコストを負担させることにつながる。そのコストに見合う改革をすべきかを判断するには、それぞれの入学者選抜が、ねらいとする十分な機能を果たしているのかを検証する必要がある。

本稿は、こうした問題関心にそって、2010 年以降に発表された研究を中心に、推薦・AO 入試で入学した大学生の特徴や、それを希望する高校生の特徴をテーマにした実証研究を整理し、その効果を検討する。それにより、今後の入学者選抜の在り方に関して政策的なインプリケーションを得ること、今後の研究的な課題を明らかにすることを目的とする。

2 方法

前述したように入学者の量的な拡大もあって、推薦・AO 入試をテーマとする研究は多い。本稿は其中でも、推薦・AO 入試がどのような学生を選抜しているかを実証的に明らかにし、その効果について言及する研究であることを抽出の条件とした。

抽出は、①『大学入試研究ジャーナル』に掲載された論文、②国立情報学研究所が運営する「CiNii」に

よって「推薦入試」もしくは「AO 入試」のキーワードによって検索された論文、③高校生や大学生を対象にした調査のうち入学者選抜の効果を分析した論文が所収されている書籍の 3 つについて、2010 年以降に発表された研究を対象に行った。これにより約 100 の研究 ②を抽出し、①個別の大学を事例とするものか複数の高校・大学にまたがる対象に実施するものか、②推薦・AO 入試に対して否定的な評価をしているか肯定的な評価をしているか ③の 2 軸で分類した(図 1)。以下では、この分類に沿って、④から順に論述する。

		推薦・AO 入試の評価	
		否定的	肯定的
分析対象	個別の大学	Ⓐ	Ⓑ
	複数の高校・大学	Ⓒ	Ⓓ

図 1 先行研究の分類

3 結果

3.1 個別大学を事例にした研究

3.1.1 ①推薦・AO 入試を否定的に評価する研究

推薦・AO 入試については、定員充足率が低い大学を中心に学生確保の手法として取り入れられており、「学力不問」と揶揄される状況が生じていると指摘されてきた(高大接続システム改革会議「最終報告」2016 年など)。実際に、推薦・AO 入試を否定的に評価する研究には、入学した学生の低学力を論じるものが多い。こうした研究では、入学後の学業成績(GPA など)のほか、英語力や言語能力などを実測したデータを、一般入試による入学者と比較している。

たとえば、池田ほか(2011)は、甲南女子大学で GPA の 4 年間の推移を追跡したところ、一般入試、推薦入試、AO 入試の順で成績が高かったことを示している。西丸(2010)も同様に同志社大学社会学部で GPA を規定する要因分析を行っている。その結果として、推薦・AO 入試による入学者の成績は一般入試の学生と同等だが、それはまじめな学生や女性が多いことが原因であり、それらの要因を統制すると推薦・AO 入試にマイナスの効果が現れることを実証している。また、大久保ほか(2011a)は福井大学工学部の新入生の調査で、AO 入試による入学者の専門基礎科目の成績が低いことを明らかにしている ④。ちなみに、論者によって評価は異なるが、推薦・AO 入試の入学者の学業成績は、他の入試区分と大きく変わら

ないと結論づける研究も見られる(石井, 2012; 坂本, 2014; 森川ほか, 2014; 片瀬, 2020 など)。

さらに、学業成績以外のデータを用いて推薦・AO 入試による入学者の学力の低さを示す研究もある。林(2012)は山口大学における検証で、AO 入学者は GPA が低だけでなく、英語学力(TOEIC 成績)も芳しくないとしている ⑤。吉村(2015)も同様に長崎大学において大学入試センターが開発中の「言語運用力」と「数理分析力」のテストを行ったところ、AO 入学者に英語の基礎学力が不足している者がいたと述べる。さらに横山(2016)も千葉科学大学を事例にして、AO 入学者は英語のプレースメントテストと定期試験のスコアが低いことを明らかにしている。これらの研究の多くは、入学者選抜にあたって学力を問う試験を行っていないデメリットを指摘している。

3.1.2 ②推薦・AO 入試を肯定的に評価する研究

前項の研究とは反対に、名古屋学院大学では赤木ほか(2011)が、長崎大学では吉村・木村(2011)が、琉球大学では山田・西本(2014)が、お茶の水女子大学では中里・安成(2015)が、広島大学では杉原ほか(2015)が、推薦・AO 入試による入学者の学業成績が高いことを示している。こうした事例では、推薦・AO 入学者は目的意識が高く、大学の授業に積極的に参加する傾向にあることを要因として挙げている。

学業成績以外の多様な資質・能力について、その高さを表す論文も多い。高地・永田(2012)は広島大学で取り入れた AO 入試の入学者について、入学の目的が明確でモチベーションが高い学生が選ばれていると評価する。内村・山本(2013)や山本(2018)は、京都工芸繊維大学の AO 入学者がプレゼンテーションやコミュニケーションの能力が高いこと、リーダーシップを発揮する学生が多いことなど、優れた能力を有することを示し、中室ほか(2014)も慶應義塾大学 SFC の AO 入試について、リーダーシップ、目的意識、帰属意識が高い学生が選ばれていると述べる。さらに、琉球大学のデータを分析した山田(2019)は、工学部に推薦入試で入学した学生が、自律性、社会性、コミュニケーション・スキル、情報リテラシー、問題解決力などの「学士力」に関する得点が有意に高かったことを報告し、大塚ほか(2020)は高知大学医学部の AO 入試入学者について思考力・判断力・表現力や主体性・多様性・協働性、関心・意欲などに関する自己評価のスコアが高いことを示している。また、木村(2020)は追手門学院大

学のAO入試入学者を4年間追跡した結果から、彼らの協調的問題解決力や進路意識・行動の得点は他の入試区分に比べて有意に高く、大学での学びを通じた成長実感を得ていることを明らかにした。これらの分析は、推薦入試やAO入試が、もともとの目的である認知的学力以外の多様な資質・能力に優れた学生を選抜する効果をもつ可能性を示すものである⁹⁾。

近年では、難関国立大学で導入された推薦・AO入試について総合的に検討する研究も現れている。倉元・大津(2011)は東北大学が他の国立大学に先駆けて2000年度に導入したAO入試について、その入学者は多くの単位を取得し、成績も良好であることを報告している。東北大学と同様に2000年度から21世紀プログラムの一環でAO入試を取り入れた九州大学も、アドミッション・ポリシーに合致した優秀な学生を選抜できたと17年間の取り組みを総括する(木村ほか, 2018)。また、楠見ほか(2016)は、2016年度から京都大学教育学部で開始した特色入試の入学者を分析し、入学時点で汎用能力が高く、探究活動への積極的な関与や学びの深さなどが裏付けられるとしている。これらの報告はいずれも、一般入試で選抜される学生とは異なる資質・能力を有した学生が選抜できていると主張する。しかし、同時に選抜問題の作成や書類の審査にかかる教職員の負荷が高く、投下されるコストが大きいという課題が示されている。

3.1.3 小括

ここで個別大学を事例とした研究成果の傾向をまとめておこう。

第一に、推薦・AO入試の効果については、マイナス面、プラス面のそれぞれに研究が多数ある。その成否は大学の置かれている状況(入学難易度など)、評価する資質・能力の内容、選抜方法や選抜にかけたコスト、実際に各選抜を経て入学してくる学生の違いなどによって異なる。それゆえ、そうした個別の大学にある背景を無視して、推薦・AO入試の良し悪しについて一括して語ることは難しい。

第二に、否定的に評価する研究は、主に推薦・AO入学者の認知的能力の低さを証明するものが多く、非認知的能力が低いことを指摘する研究はほとんど見られない。一方で、肯定的な側面を強調する研究には、彼らの認知的能力の高さ(もしくは、一般入試による入学者と遜色ないこと)を示すものもあるが、それよりも主体性や協働性、コミュニケーション力といった汎用能力、非認知的能力に卓越していることを実証するものが多い。多面的・総合的に資質・能力を評価す

る選抜方法の特性が現れているのだろう。

第三に、個別大学を事例とした研究からは、推薦・AO入試の構造的な課題が透けて見える。推薦・AO入試で能力が高い学生を獲得できているのは、相対的に見て選抜性が高い大学である。しかし、こうした大学でも、選抜にかかるコストを考えたとき、一般入試を超えるメリットがあるかがつねに問題となる。一方で、選抜性が低い大学では、推薦・AO入試によって一定数の学生が確保できるメリットを享受できるが、大学で学ぶ資質に欠ける学生を受け入れざるを得ない状況を生む。

このように個別大学の事例の積み上げることでも一定の傾向は読み取れるが、各事例は個別性が高く、推薦・AO入試がもつ効果を一般化することは難しい。そこで、次に、複数の高校・大学を対象にした調査からわかる結果を確認する。

3.2 複数の高校・大学を対象とする研究

3.2.1 ①推薦・AO入試を否定的に評価する研究

対象者が複数の高校・大学にまたがって行われている調査の強みは、アウトカムを何に設定するにせよ、選抜方法以外に影響を与える要因(例えば、所属する学校の入学難易度の違いなど)を統制することが可能なことである。それにより、個別大学の事例よりも正確に、推薦・AO入試の効果を推定できる。ただし、複数の高校・大学をまたぐ調査は代表性を担保するサンプリングが難しく、入試区分についての変数が含まれる調査、入学者選抜をテーマにした研究となるとさらに絞られる。まだまだ今後の研究の発展が待たれる領域であること間違いない。

それでも、推薦・AO入試に対して批判的に検討する調査研究が比較的多く見られる。たとえば、中村(2010)は、推薦・AO入試の拡大が、入学者選抜を「エリート選抜」から「マス選抜」へと変質させ、従来は大学に進学しなかった低学力で、学習習慣が身につけていない高校生の入学を許していることを示す。専門高校を含む進路多様校を対象とした量的調査と質的調査では、高校入学当初は大学進学を希望していなかった生徒が、推薦・AO入試によって四年制大学に水路づけられる「四大シフト」現象が見られるという。同じ調査では片山(2010)も、進路多様校における大学進学者の多くが指定校推薦を利用しており、教師も推薦入試を強く意識した進学指導を行っていることを明らかにしている。また、別の高校生対象の調査では西丸(2015)が、入学難易度の高い普通科の高校生ほど一般入試を利用し、入学難易度が低い普通

科や専門学科の生徒が推薦入試を利用していることを指摘している。彼らは進路決定を先送りし、将来の生活や進路を考えるためにモラトリアム的に大学に進学する傾向があるという。さらに、生活時間調査から学校外学習時間の規定要因を分析した加藤（2019）は、推薦・AO 入試を希望する高校生の学習時間が短いこと、一般入試を希望する高校生の学習時間は部活動参加や母親学歴といった家庭環境などの要因によって左右されないのに対して、推薦・AO 入試希望者はそうした要因によって学習時間が異なることを明らかにしている。

以上は高校生を対象とした研究であるが、大学生対象の調査にも同様の指摘は散見される。樋口（2013）は、ベネッセ教育総合研究所が実施する大学生調査をもとに、推薦・AO 入試受験者の約半数が、高校 3 年で 1 時間に満たない学習しかしておらず、5 人に 1 人は受験対策すらしていないというデータを提示している。東京大学大学経営・政策研究センターが実施する「高校生調査」と大学入学後の「追跡調査」を分析した濱中（2013）も、推薦・AO 入試による入学者の学力が低く、とくに選抜性の低い大学では入学後の学習に問題を生じる可能性が高いと述べている。加えて、同じ調査を用いて行った二次分析（中西，2017）では、国立大学への進学者といったエリートセクターにおいても、推薦・AO 入試で入学した学生の入学後の学業成績は、低い傾向が見られるとしている。これらの研究はいずれも、推薦・AO 入試が、進学に必要な資質・能力を備えていない高校生の進学を拡大させた可能性や、1 ランク下の学力しかない学生の入学を許していることを実証し、安易な大学進学を拡大させていることを批判している。

3.2.2 ①推薦・AO 入試を肯定的に評価する研究

推薦・AO 入試を否定的にとらえる研究が多い一方で、数は少ないながら肯定的に評価する研究もある。山村・濱中（2018）は、首都圏にある 10 の高校を対象にしたパネル調査の高校 1 年生のデータから進学中堅校では推薦入試での進学を考える生徒の定期テストの学習時間が長いことを示している。学内で良い成績をとることが有利になる推薦入試には、定期テスト対策の学習を促進する側面がある。中西（2010）も、高校生を対象とした追跡調査（JELS : Japan Education Longitudinal Study）をもとに、非進学校で四大シフトをするのは、学校文化に適応的で、学習頻度も高く、成績良好な生徒であるとする。また、大学新入生を対象とした大規模調査（JFS : Japan

Freshman Survey, 2008 年実施）を分析した山田（2011）は、AO 入試が自立的に問題解決を行う学生を、推薦入試が明確な目的意識を持つ学生を選抜していることを指摘している。同じ JFS の 2013 年度調査を分析した西郡（2016）はこれより中立的だが、「向上心」といった資質では一般入試入学者のスコアが高いものの、「探求心」では推薦・AO 入学者のスコアが高いことを示している。

これらとは別に、推薦・AO 入試が一律にプラスやマイナスの効果を持つのではなく、入試方法の違いや実施される条件によって効果が異なることを示す研究もある。山村・濱中（2018）と同じ調査の高 1~3 年生のパネルデータを分析した山村（2019）は、指定校推薦や公募推薦と AO 入試とで決定的な相違があるとしている。AO 入試を志向する生徒は校内での成績や学習意欲が低く、学習時間も短い、それと比べて指定校推薦や公募推薦を志向する生徒は、校内での成績を上げるために学習意欲を高めたり、学習時間が長くなったりする傾向があるという。山村はこの論稿の中で西丸（2015）を引用しつつ、多くの研究が一般入試以外の方法（公募推薦、AO 入試、指定校推薦、附属校推薦など）を一括りにしている点に限界があると述べている。さらに藤村（2013）は、東京大学大学経営・政策研究センターの「全国大学生調査」の分析でさまざまな条件を統制したところ、入学偏差値の高い学部では推薦入試で入学した学生の成績は良いが、ランクの低い学部に入学者の成績はふるわないと述べる。大学の入学難易度によって、推薦入試の効果が異なるということである。推薦入試を見直す必要に迫られているのは難易度の低い大学・学部だが、かといってそれらの大学・学部で高いレベルの選抜を課しても受験生は敬遠する。難易度の低い大学・学部では特に、育成しながら選抜する教育的な入試が重要なことを示す結果と言えるだろう。

3.2.3 小括

ここで複数の高校や大学を対象に行われた調査からわかる研究成果の傾向をまとめておこう。

第一に、複数の高校や大学をまたいで入学者選抜の効果を検証した研究は数としてはあまり多くないが、相対的に見て推薦・AO 入試について否定的にとらえるものが多い。それらが、おもに選抜性の低い大学で導入され、進路多様校の生徒の大学進学を促進したことは、一定の頑強性を持った結果なのだろう。

しかし、第二に、それだけでは個別大学の追跡調査に「うまくいったケース」の事例が多いことの説明が

つかない。もちろん自らが所属する大学に肝いりで導入した推薦・AO入試に対してマイナスの評価を下していくといった心理機制（バイアス）が生じた可能性も考えられるが、個別大学の事例に比較的多い学力以外の多様な資質・能力を評価する研究が、複数の高校・大学をまたがる調査には少ない印象を受ける。そうした研究は、山田（2011）や西郡（2016）くらいしかなく、多様な資質・能力をアウトカムにした効果検証を増やしていくことが、この領域の大きな課題と言える。もともと推薦・AO入試は教科学力以外の資質・能力を積極的に評価することを意図した選抜でもあり、多面的な検証が求められる。

第三に、教科学力にせよ、多様な資質・能力にせよ、それぞれの選抜がどのような力を評価しているかに関して、大学や学部による違いを検討した研究は少ない。個別大学の研究では、選抜性の高い大学において多大なコストを投下した事例に成功が多いと感じるが、そうだとすれば「身も蓋もない」結果である。それ以外の成功条件を見出すことも、教育実践においては重要なテーマである。

いずれにしても、複数の高校・大学を対象とした研究は数が少ない。今後、そうした調査の蓄積や、分析に利用できるデータの共有化といった環境づくりが重要といえるだろう。

4 まとめ

4.1 政策へのインプリケーション

本稿は、「個別大学の追跡調査」と「複数高校・大学を対象とした調査」の先行研究における分析結果をもとに、推薦入試・AO入試の効果について否定的な結果が示されているか、肯定的な結果が示されているかを軸にした系統的なレビューを行った。また、その傾向を、各項の小括においてまとめた。ここでは、それらの結果から引き出される政策的なインプリケーションを考察しておきたい。

まず指摘したいのは、推薦・AO入試の効果の多様性についてである。学業成績のような認知的能力においても、主体性や協働性のような非認知的能力においても、プラス・マイナスの表れ方はそれぞれの大学の置かれている状況によって異なる。文部科学省は、いずれの選抜においても3つの学力をバランスよく評価することを求めているが、どのような選抜が効果を持つかは個別的である。また、大学ごとのリソースや投下できるコストの状況に鑑みて、各大学が戦略的に方法を選択してもよいはずである。改革の方針をすべての大学に一律に適用するのは疑問がある。高校入試

における推薦入試の拡大の影響を研究した中澤（2002）は、そこで重視される「個性」が結局は学力上位層に偏って分布するため、多様な軸による選抜という理想とは反対の状況を生んだと述べる。大学入試改革においても、これと同じことが起きないとは限らない。一律の制度の適用が意図せざる結果を生む可能性を考慮すべきだろう。

すでに多くの大学で多様な選抜方法を採用するとともに、入学者のデータを収集し、その違いを検証している。この姿勢は積極的に評価したい。結局のところ、選抜において何を重視するかという目標設定においても、それをどう測定するかという技術的問題においても、唯一の正解があるわけではない。どのような方法をとっても、成果と課題は生まれるだろう。各大学が個別の事情を考慮して選抜方法を定め、その有効性を確かめるデータを収集し、より妥当性の高い方式を採用するしかない（繁樹，2014）。その試行錯誤こそが、個々の大学が置かれている状況に応じた改善を実現すると考える。

さらには、データ活用は選抜方法の判断に用いるだけでなく、学生一人ひとりの成長にどうつなげるかといった教育的な利用が求められる。入学者選抜には、どのような資質・能力を備えた生徒を選抜するかという効果だけでなく、それぞれの選抜を経た意味、すなわち教育的な効果がある。いずれの選抜も、それを経験したことは大学での学びに影響を与えるはずだ。それぞれの選抜方法で入学した学生が、どのような成長を遂げて卒業していくのか。学生個人を追跡して教育活動に生かす取り組みを広げることが必要だろう。入学者選抜を選抜から教育に転換させる（荒井，2011）うえでも、データ活用は欠かせない。

4.2 研究面での課題

最後に、今日の入学者選抜の効果に関する研究の状況を踏まえて、研究上の課題を4点ほど示す。

一つめは、繰り返しになるが、複数の高校・大学を横断する研究の不足についてである。前述したように、そのような調査は実施そのものが難しい。また、多様な資質・能力を客観的に評価するのも困難であり、当面は間接評価（学生調査など）を指標にせざるを得ない。その限界を自覚し、結果を慎重に扱う謙虚さは求められる。それでも複数の高校・大学をまたいで、各選抜方法が多様な資質・能力をどのように評価しているか、それが大学教育におけるアウトカムにどうつながっているのかの検証を、もっと充実させる必要があるだろう。かつ、そのデータが研究と実践に利用でき、

自大学と比較できる形で成果と課題を検証できる環境整備が望まれる。

二つめは、縦断研究の欠落である。対象者が大学に入学する前からデータを取り始め、入学後も継続してデータを収集するパネル調査は、入試研究に限らず少ない⁸⁾。今は、高校生調査と大学生調査が別々に実施されているが、入学者選抜の研究であればなおさら、高大をつなぐ調査が不可欠である。

三つめは、研究の質の向上についてである。とくに個別大学の検証では、推薦・AO入試での入学定員が限られるために十分なサンプルが得られないこともあり、統計的な分析に限界がある場合も多い。それでも、他の変数の影響を考慮したり、差の検定を行ったりするなど、科学的な検証には一定の手続きを踏むことが重要だろう。そうした手続きが不足する研究も散見される。

これと関連して四つめは、「選抜効果」の考慮についてである。木村(2007)は過去の入試政策において、選抜効果を考慮しない分析から結果がゆがめられ、誤った結論が導き出されたことを実証している。入学者選抜の研究で扱うデータのほとんどは入学者のものであるため、真の値からゆがむ可能性が高い。そのため、選抜効果が影響している可能性を考慮し、場合によっては修正公式の適用や傾向スコアによる補正を行うようなことが求められる⁹⁾。

以上、推薦入試・AO入試を中心に入学者選抜の効果に関する研究の検討を行ってきたが、大学入試は教育改革の中心的イシューであり、社会的な関心が高い。また、それだけでなく、生徒・学生が成長を遂げる機会でもある。一層の科学的根拠をもって議論する必要がある。

注

- 1) 「平成 33 年度大学入学者選抜実施要項の見直しにかかる予告」では、従来の一般入試を一般選抜、推薦入試を学校か推薦型選抜、AO入試を総合型選抜に改めているが、本稿では従来の呼び名で統一する。
- 2) 抽出条件に合う主要な論文は一定程度網羅されていると考えるが、それでも抽出には恣意性が生じたり、抽出から漏れたりしたものがある可能性は残る。
- 3) 多くの論文は多面的な視点で効果を検証しており、単純に肯定的か否定的かに二分できない内容のものも含まれている。本稿では、論旨を筆者が解釈して、どちらかに振り分けた。
- 4) 大久保ほか(2011b, 2012)の研究では、AO入試による入学者のモチベーションが高い、入学後の成績の伸びが大きいといったプラスに評価するものもある。

5) 林の一連の研究では、推薦・AO入試の入学者の GPA が高く、資質・能力の自己評価も高いといったプラス面を示す研究もある(林, 2014)。

6) このほか、柴ほか(2015)は高知大学教育学部において推薦入学者の教員正規採用率が高いことから彼らが面接(二次試験)に強いことを、大塚ほか(2015, 2017, 2018)の高知大学医学部における一連の研究では AO 入学者の対人関係能力が高く、医師としての資質・能力に長けていることを明らかにしている。

7) 条件によって効果が異なるという研究のほかに、そもそも入学者選抜はほとんど効果を持っていないとする研究もある。三好(2015)は、15 大学 8 専門分野の学部 1~4 年生を対象にしたアンケート調査の結果から、「教養的知識・能力」「専門的知識・能力」「汎用的能力」「語学能力」のいずれに対しても、大学入試の形態は統計的に有意な影響が認められないとしている。

8) 高大をつなぐ数少ないパネル調査として京都大学と河合塾が運営する「学校と社会をつなぐ調査」がある(溝上, 2018)。ただし、この調査では入学者選抜を主要テーマにはしていない。

9) 選抜効果への配慮の必要は、西郡(2011)のレビュー研究でも指摘されているが、その後も実際に検討されている研究は多いとは言えない。

参考文献

- 赤木充宏・日比野至・肥田朋子・平野孝行(2011)「名古屋学院大学人間健康学部リハビリテーション学科における学業成績の調査：入試区分の違いによる検討」『名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇』**47**(2), 73-81.
- 荒井克弘(2011)「高大接続の日本的構造」『高等教育研究』**14**, 7-21.
- 池田太臣・伊藤実歩子・山田尚子・佐伯勇(2011)「甲南女子大学におけるAO入試に関する現状と課題」『甲南女子大学研究紀要 人間科学編』**47**, 107-111.
- 石井秀宗(2012)「推薦入試の経年分析—志願者の動向及び学業成績の検討」『大学入試研究ジャーナル』**22**, 35-42.
- 内村浩・山本以和子(2013)「『学びの接続』の視点からAO入試のデザインを考える—京都工芸繊維大学のダビンチ入試の場合」『大学入試研究ジャーナル』**23**, 1-5.
- 大久保貢・金澤悠介・倉元直樹(2011a)「福井大学工学部新入生における高校時代の履修状況と入学後の初年次成績—平成21年度新入生アンケートに基づく調査研究(1)」『大学入試研究ジャーナル』**21**, 59-67.
- 大久保貢・金澤悠介・倉元直樹(2011b)「福井大学AO入試入学生意識と態度に見られる特徴について—平成21年度新入生アンケートに基づく調査研究(2)」『大学入試研究ジャーナル』

- ル』 **21**, 135-142.
- 大久保貢・金澤悠介・倉元直樹 (2012) 「AO入試入学生の追跡調査—福井大学工学部の事例」『大学入試研究ジャーナル』 **22**, 145-153.
- 大塚智子・倉本秋・高田淳・武内世生・瀬尾宏美 (2015) 「AO入試における態度・習慣領域評価の妥当性—高知大学医学科入学者の調査・報告」『大学入試研究ジャーナル』 **25**, 43-48.
- 大塚智子・武内世生・高田淳・倉本秋・瀬尾宏美 (2017) 「卒業後追跡調査より『主体性・多様性・協働性』評価の有効性を示す」『大学入試研究ジャーナル』 **27**, 55-61.
- 大塚智子・武内世生・高田淳・瀬尾宏美 (2018) 「『主体性・多様性・協働性』を重視する多面的評価による入学者の卒業後追跡調査」『大学入試研究ジャーナル』 **28**, 61-66.
- 大塚智子・岡安孝・喜村仁詞・武内世生 (2020) 「アドミッション・ポリシーに基づく入学者選抜の妥当性—入学直後の自己評価による検証」『大学入試研究ジャーナル』 **30**, 86-91.
- 片瀬一男 (2020) 「AO入試再訪：10年の後に」『東北学院大学教育研究所報告集』 **20**, 5-34.
- 片山悠樹 (2010) 「進路多様校における進路指導」中村高康編著『進路選択の過程と構造—高校入学から卒業までの量的・質的アプローチ』74-94, ミネルヴァ書房.
- 加藤一晃 (2019) 「推薦・AO入試希望者における高大接続上の課題—学校外学習時間の規定要因分析から」『日本高校教育学会年報』 **26**, 52-61.
- 木村拓也 (2007) 「大学入学者選抜と『総合的かつ多面的な評価』—46答申で示された科学的根拠の再検討」『教育社会学研究』 **80**, 165-186.
- 木村拓也・田尾周一郎・林篤裕・副島雄児 (2018) 「総合的且つ多面的な評価に基づく入学者選抜とその学修成果の可視化—九州大学21世紀プログラムの事例」『名古屋高等教育研究』 **18**, 177-198.
- 木村治生 (2020) 「特色あるAO入試の成果と課題に関する検討—追手門学院大学アサーティブプログラム・アサーティブ入試を事例に」『アサーティブ学習高大接続研究』 **3**, 2-14.
- 楠見孝・南部広孝・西岡加名恵・山田剛史・斎藤有吾 (2016) 「パフォーマンス評価を活かした高大接続のための入試—京都大学教育学部における特色入試の取り組み」『京都大学高等教育研究』 **22**, 55-66.
- 倉元直樹・大津起夫 (2011) 「追跡調査に基づく東北大学AO入試の評価」『大学入試研究ジャーナル』 **21**, 39-48.
- 高地秀明・永田純一 (2012) 「AO入試に関する一考察—広島大学A学部BコースのAO入試から見えてきたこと」『大学入試研究ジャーナル』 **22**, 265-270.
- 坂本尚志 (2014) 「医学部医学科におけるAO入試および地域枠入試の導入とその結果」『大学入試研究ジャーナル』 **24**, 201-206.
- 繁榊算男 (2014) 「大学入試を考える」『IDE：現代の高等教育』 **566**, 63-69.
- 柴英里・加納理成・北川晃・武久康高・服部裕一郎・柳林信彦・横山卓 (2015) 「入試区別にみた教育学部生の傾向に関する一考察」『高知大学教育学部研究報告』 **75**, 17-23.
- 杉原敏彦・高地秀明・永田純一 (2015) 「AO入試の何が変わり、何が変わらなかったか—広島大学AO入試の10年」『大学入試研究ジャーナル』 **25**, 117-122.
- 中村高康 (2010) 「四大シフト現象の分析」中村高康編著『進路選択の過程と構造—高校入学から卒業までの量的・質的アプローチ』163-183, ミネルヴァ書房.
- 中室牧子・藤原夏希・井口俊太郎 (2014) 「『AO入試』の再評価：慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス(SFC)を事例に」『Keio SFC journal』 **14**(1), 178-197.
- 中西啓喜 (2010) 「現代ノンエリート高校生の進路選択—“四大シフト”に注目して」『青少年期から成人期への移行についての追跡的研究 JELS』 **13**, 13-22.
- 中西啓喜 (2017) 「国立大学は推薦・AO入試によって『成績優秀な学生』を獲得できているのか？—エリートセクターにおけるマス選抜の導入」『高等教育ジャーナル：高等教育と生涯学習』 **24**, 63-74.
- 中里陽子・安成英樹 (2015) 「大学入学者選抜試験におけるAO入試の位置づけとお茶の水女子大学のAO入試」『高等教育と学生支援』 **6**, 12-18.
- 中澤渉 (2002) 「推薦入学制度は『成功』しているのか—受験生の合理的選択仮説に基づく実証分析」『教育社会学研究』 **70**, 203-223.
- 西郡大 (2011) 「個別大学の追跡調査に関するレビュー研究」『大学入試研究ジャーナル』 **21**, 31-38.
- 西郡大 (2016) 「どのような学生が『主体性』を伴う学習行動をしてきたか—日本人版新入学生調査 (JFS2013) を活用した要因分析」山田礼子編著『高等教育の質とその評価—日本と世界』213-228, 東信堂.
- 西丸良一 (2010) 「入学者選抜方法による大学の学業成績—同志社大学社会学部を事例に」『同志社大学教育開発センター年報』 **1**, 16-25.
- 西丸良一 (2015) 「誰が推薦入試を利用するか—高校生の進学理由に注目して」中澤渉・藤原翔編著『格差社会の中の高校生—家族・学校・進路選択』68-80, 勁草書房.
- 濱中義孝 (2013) 「入試と入学後の学習」『IDE：現代の高等教育』 **554**, 51-57.
- 林寛子 (2012) 「入試区別にみる学業成績と生活態度と卒業時の意識」『大学入試研究ジャーナル』 **22**, 79-84.
- 林寛子 (2014) 「入学後の成功と資質・能力自己評価にみる入試の評価—山口大学入学者追跡調査・データ分析より」『大

学入試研究ジャーナル』24, 151-156.

- 樋口健 (2013) 「『脱競争時代の大学入試』と高校生の学習・意識」『IDE：現代の高等教育』554, 42-47.
- 藤村正司 (2013) 「大規模学生調査から学習成果と学習時間の構造を掴む—横断的・時系列的分析」『広島大学高等教育研究センター 大学論集』44, 1-17.
- 溝上慎一 (2018) 『高大接続の本質—「学校と社会をつなぐ調査」から見えてきた課題』学事出版.
- 三好登 (2015) 「大学生の学習時間・学習意欲と学習成果との関係」『大学教育学会誌』37(1), 105-113.
- 森川修・山田貴光・小山直樹・清水克哉 (2014) 「鳥取大学のAO入試実施10年を振り返って」『大学入試研究ジャーナル』24, 237-242.
- 山田美都雄 (2019) 「追跡データにみる入学者選抜と『学士力』指標の関連性について—琉球大学を事例として」『大学入試研究ジャーナル』29, 36-41.
- 山田美都雄・西本裕輝 (2014) 「追跡データを用いた大学生の成績推移の分析」『大学入試研究ジャーナル』24, 29-34.
- 山田礼子 (2011) 「大学からみた高校との接続—教育接続の課題」『高等教育研究』14, 23-46.
- 山村滋 (2019) 「入試方法志向の変化とそのメカニズム」山村滋・濱中淳子・立脇洋介『大学入試改革は高校生の学習行動を変えるか—首都圏10校パネル調査による実証分析』89-106, ミネルヴァ書房.
- 山村滋・濱中淳子 (2018) 「高校一年次の学習時間—定期考査および大学入試方法との関係性を中心に」『大学入試研究ジャーナル』28, 87-92.
- 山本以和子 (2018) 「ダビンチプログラムの高大トランジション面における検証—入試と入学前教育の機能設計に着目して」『大学入試研究ジャーナル』28, 163-168.
- 横山悟 (2016) 「入学試験区分による経時的データに基づいた大学初年次学生の英語力の分析」『千葉科学大学紀要』9, 9-16.
- 吉村宰 (2015) 「AO入試入学者の『言語運用力』『数理分析力』」『大学入試研究ジャーナル』25, 49-56.
- 吉村宰・木村拓也 (2011) 「志願・入試・学務データに見られる入学者選抜方法の特徴」『大学入試研究ジャーナル』21, 165-170.